

アルゼンチンにおけるラグビー事情

藤田 悟郎

ラテンアメリカ、南米といえばフットボールという印象が強すぎて、「アルゼンチンでもラグビーをやっているの?」というのが、日本人の一般的な受け止め方と考える。アルゼンチン国内においても一般的にスポーツといえばフットボールであることは間違いない。しかし、アルゼンチンのラグビーの歴史は古く、1864年にはアルゼンチン最古のラグビークラブ（ブエノスアイレス・クラブ）が英国人のクラブとして発足したと言われている。そして、富裕なアマチュア・プレーヤー、一部の愛好家のエリート・スポーツとして長年親しまれてきたのである。国際ラグビー・フットボール協議会が結成されたのが1886年であることから見ても、歴史の古さがよく分かる。（なお、当初のフットボールのFが消えて国際ラグビー評議会と名称が変わったのは、ようやく2000年のことである。）

アルゼンチンの旧宗主国はスペインであり、公用語もスペイン語であるが、鉱物資源が豊富で自然環境に恵まれていたことから、旧宗主国のスペインのみならず欧州各国から様々な人間が流入した。そして、なかでも英国人は港湾、鉄道、産業等の面で多くの遺産を残しており、また、文化的にもゴルフ場の建設、競走馬、ラグビーなどに影響を与えたと言われている。上記したように、富裕なアマチュア・プレーヤーが中心となって行われてきたラグビーの試合には、フットボールと違い若い女性がたくさん来ると、よく言われている。

それでは、ラグビーそのものは世界的な位置づけの観点からどうであったのかを見ていきたい。

アルゼンチンでは、フットボールのようにプロ・リーグはなく、あくまでもアマチュア・スポーツとして行われてきている。従い、国の代表の「ロス・プーマス」に選ばれても、仕事の都合や家族との関係で代表を辞退するケースも出ている。現在、アルゼンチン・ラグビー協会は25の州チームで構成されており、学生・大学生、クラブチームなど色々なクラスに分かれているが、およそ10万人のプレーヤーがいると言われている。学生・大学生のラグビーは紆余曲折を経て2001年に学生ラグビー委員会として再構成され、学生ラグビー全体を包含する組織として存在している。以前は、大学でラグビーをしながら、地域のクラブチームに於いてもプレーすることが認められていたが、05年には禁止された。このような状況の中で、アルゼンチン国内での最も重要な戦いは「国立クラブ競技会」であり、最近の勝者は“Hindu”であった。

アルゼンチンは国際ラグビー評議会のメンバーであるが、創設メンバー（イングランド、スコットランド、アイルランド、ウェールズ、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカ、フランスの8か国）ではなく、カナダ、イタリア、日本とともに、ラグビー新興国として位置づけられ、評議会理事会に1名の代表を出している。この評議会の創設メンバーとアルゼンチン、イタリアの10か国が世界のラグビーにおいて「レベル1」と評されており、これらの国だけで世界のラグビー・プレーヤーの80%近くを占めると言われている。また、アルゼンチン・ラグビー協会は南米大陸ラグビー同盟（ウルグアイ、ブラジル、チリ等が参加）の創設者であり、

アルゼンチン代表（Los Pumas）のラグビー・ワールドカップに於ける成績一覧

回数	年	成績	優勝国	出場 チーム数	備考（その他の南米国）
第1回	1987年	1次リーグ敗退（1勝2敗）	ニュージーランド	16	アルゼンチンのみ
第2回	1991年	1次リーグ敗退（3敗）	オーストラリア	16	アルゼンチンのみ
第3回	1995年	1次リーグ敗退（3敗）	南アフリカ	16	アルゼンチンのみ
第4回	1999年	準々決勝で敗退	オーストラリア	20	ウルグアイ出場（1次リーグ敗退）
第5回	2003年	1次リーグ敗退（2勝2敗）	イングランド	20	ウルグアイ出場（1次リーグ敗退）
第6回	2007年	3位	南アフリカ	20	アルゼンチンのみ
第7回	2011年	準々決勝で敗退	ニュージーランド	20	アルゼンチンのみ
第8回	2015年	4位	ニュージーランド	20	ウルグアイ出場（1次リーグ敗退）

1951 年以来、参加しなかった 81 年を除いて、南米のラグビー・チャンピオンであり続けている。

国際ラグビー評議会は、1987 年に第 1 回ラグビー・ワールドカップを開催し、95 年にはアマチュアリズムから脱却し、積年の課題であったプロラグビーの道を認めるようになり、世界のラグビーは大きな変貌を遂げていく。ここで、アルゼンチン・ラグビーのワールドカップでの成績を見ていきたい。(表 参照)

これまで 8 回の大会があったが、まだ、優勝の美酒は味わえないものの、最近の躍進は目を見張るものがある。2007 年の第 6 回大会では、アルゼンチンは優勝した南アフリカに準決勝で 13 - 37 で負けたものの、大会を通じて負けたのはこの試合だけであり、3 位になった。特にこの大会はフランスで行われ、完全アウェーの状況の中で地元チームに 1 次リーグ、3 位決定戦の 2 回とも勝ち、それまでフットボールに特化していたアルゼンチン大衆の目をぐんと引き付けた。また昨 15 年の第 8 回大会でも 4 位に入ったのは記憶に新しいところである。

近年の国際試合でのこの好成績は、アルゼンチン・ラグビーの国内における大躍進をもたらし、ようやくラグビーに 1800 年末の開始当初以来の「エリート・スポーツ」から大衆化をもたらしたと言える。しかし、この方向性が確固たるものとして定着しうるかどうかは、今後のワールドカップ、また、今年から正式に参戦し始めた「スーパー・ラグビー」(注)においてアルゼンチンのチーム(ジャガーズ)がより良い結果を出



ジャガーズのプレーヤー (ジャガーズの HP より)

せるかどうかにかかっていると言える。

また、アルゼンチンの代表チームは「ロス・プーマス」(英語でピューマ)の愛称で親しまれてきており、これまで、このメンバーに選ばれてもシーズンオフにはヨーロッパのプロ・クラブに所属してプレーすることが認められてきたが、国の代表に選ばれるためには、プ

レーヤーは先ずアルゼンチンラグビー協会と契約しなければならず、2016 年から参戦した「スーパー・ラグビー」との関係もあり、過渡的な措置としてこのことが認められなくなると考えられる。

ラグビーそのものとは直接の関係はないが、アルゼンチンのラグビー・ジャージの左胸に刺繍されたエンブレムの逸話を紹介しておく。(日本チームは桜の花である)

アルゼンチン代表のジャージは水色と白の横縞で、その左胸に斑点のある黄金色のネコ科の猛獣が描かれている。これは、実はピューマではなく、パラナ川とウルグアイ川に挟まれたラプラタ河口のジャングルに生息する、日本名パラナ・ジャガーという動物なのである。正式にはジャヤガレットと呼ばれるジャガーの亜種である。ピューマの体には斑点はなく、また、ピューマは北米大陸のみに生息しており、南米には生息していないのである。

それでは、アルゼンチン代表がどうして「ロス・プーマス」と呼ばれるようになったのだろうか。1965 年にアルゼンチン代表チームが南アフリカへ遠征したときに、ヨハネスブルグの空港で、この時居合わせた記者が、好奇心から、選手にエンブレムの動物は何かと尋ね、その選手は「ジャガレット」と答えたが、記者は、そんな聞いたこともない動物の名前は分からない、これは「ピューマ」だと勝手に決めつけて、その翌日から、「ピューマ」の名前が新聞紙面ににぎわしたということらしい。

この話は、アルゼンチン代表として遠征に参加し、後に、ラグビーの記者になった N. ソラール氏が、自ら目撃したことを語った話だけに、信ぴょう性が高い。

2019 年に日本で開催される第 9 回ラグビー・ワールドカップにおいて、アルゼンチン代表、日本代表の両国が出場し、8 強に勝ち残り、壮絶な戦いをしてくれることを祈念して筆をおきたい。

(ふじた ごろう 一般社団法人日本アルゼンチン協会業務執行理事)

(注) スーパー・ラグビー：1996 年からニュージーランド、オーストラリア、南アフリカの 3 か国に本拠地を置くチームで争われてきたラグビーの国際的なプロリーグで、今季よりジャガーズ(アルゼンチン)、サンウルブズ(日本)も加わり、計 18 チームが 4 つの地区に分かれて、それぞれ 15 試合を戦う。各地区上位 2 チームが準々決勝に進む。

2015年のワールドカップで4強を独占した南半球勢の各国代表クラスの選手が揃い「世界最高峰リーグ」と称される。
因みに、16年4月23日（土）に秩父宮ラグビー場で行われたジャガーズ戦でサンウルブズが36－28で記念すべき初勝利をあげた。

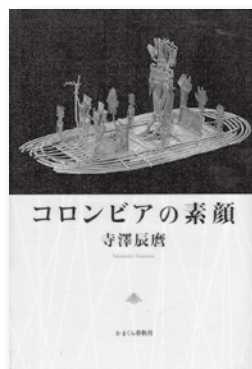
【参考文献】

『世界のラグビー基礎知識』 小林 深緑郎 ベースボールマガジン社
『ラグビー 進化する世界のプレースタイル』 グニエル・プティエ（井川 浩訳）白水社クセジュ文庫
『ザ・ワールドラグビー』 大友 信彦 新潮社

なお、在日アルゼンチン大使館の Sr. Da Ponte 書記官には、アルゼンチンにおける最近のラグビー事情を色々ご教示戴いた。

上記の皆様方には、心より御礼申し上げます。

ラテンアメリカ参考図書案内



『コロンビアの素颜』

寺澤 辰磨 かまくら春秋社
2016年4月 195頁 1,800円＋税 ISBN978-4-7740-0679-6

コロンビアについて、人口動態、地勢、近代史、日系人を概観した「概要」から始まり、コロンビアの現代政治における特質である「二大政党制と1991年憲法」、格差社会の定着とそれが大きな要因でもあり、長く暴力の横行を引き起こした反政府武装ゲリラ、麻薬密売組織の存在を「社会構造」で、「第二次世界大戦後のラテンアメリカ諸国の経済政策」では輸入代替工業化政策の採りあげと成果、新自由主義導入後の動向を主要国との比較で、さらに現代政治の中で試みられた「ガビリア政権の経済改革」と「ウリベ政権の経済改革」の分析の後、最終章「コロンビアの経済運営の特殊性」について解説している。

著者は大蔵省出身で1975年から外務省に出向して在アルゼンチン大使館に在勤、国税庁長官から退官後2007～10年の間駐コロンビア大使を務めた。コロンビアはウリベ政権以降、ゲリラや麻薬組織を追い詰め、劇的に治安を回復させているが、それらの背景となったそもそもの歴史、社会・経済、政治構造、近年の経済改革や経済運営の特殊性を本書で知り、さらに著者帰国後11年にアジア経済研究所から上梓した『ビオレンシアの政治社会史－若き国コロンビアの悪魔払い』<http://latin-america.jp/archives/5881> と合わせ読めば、以前のイメージとは大きく変容した現在のコロンビアを理解する上で極めて有益な解説書である。

（桜井 敏浩）